

第二十四課

わたしの名によって

勝利ある祈り

「わたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によってそれをあなたがたにお与えになります。あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。その日には、あなたがたはわたしの名によって求めるのです。」

(ヨハネ一四・一三、一四、一五・一六、一六・二三、二四、二六)

この時まで、弟子たちは、キリストの御名によって求めたことはなく、キリストもこのような表現を用いることはされませんでした。それに最も近い表現は、「わたしの名によって集まる」というものです。この告別のことばの中で、主は、御名ということばを、「何でも」「あなたのほし

いものを」などの、無制限の意味を持つ約束と結びつけて絶えず繰り返す、御名こそが、唯一の、しかもすべての条件を満たす祈りであるとお教えになりました。祈りの力と答は、御名の正しい用い方にかかっています。

人の名とは何でしょうか。人を呼んだり、その人を表示したりすることばです。私が一つの名を口にしたり聞いたりすると、その人について知っていること、その人の印象などが目の前に浮んできます。王の名には、王の名誉、力、王国が含まれます。王の名は、その権力の象徴です。そのように、神の御名は、見えないお方の栄光のある部分を具体化し、象徴化するものです。そして、キリストの御名は、キリストがなさったこと、キリストがどのようなお方であるかということ、私たちの仲保者としてなされることを表すものです。

ところで、他人の名によって何かをするというのは、どういうことでしょうか。それは、他人の力と権威を、自分の代理や身代りにすることです。そのように、他人の名を使うことは、利害を共有にすることを前提とします。まず、自分の名誉や利害の安全を確認しなければ、自分の名を勝手に他人に使わせるようなことはしないでしよう。

そこで、イエスは私たちに御名の使用をお許しになり、その御名によって求めるものは何でもかなえられると保証されましたが、この場合はどうでしょうか。ある人が、ある特別な場合、他の人に自分の名を使って何でも求めてよいと言った場合と比較してみても、ここでのイエスの場

合には全く及びません。イエスは、すべての弟子たちに、いかなる時にも、どのような求め方をしてもよいと、御名の全く自由な、無制限の使用を許されました。もちろん主は、御自身の利益を私たちに託しても別条なく、また主の名譽も私たちの手に安全に保たれることがお分りにならなかったとしたら、決してその力をお与えにはならなかったでしょう。他人の名を自由に使うということは、信頼と密接な結びつきがある証拠です。自分の名を他人に使わせる者は、その人を自分のために行動させます。また、他人の名を使おうとする者は、自分の名を無価値のものとして放棄します。他人の名で行動する者は、自分を否定します。自分自身がどのような者であるかを問題にする代りに、その人の名だけでなく、その人の人となりまでも問題にするのです。

人の名は、法律的にも用いられ得るものです。商人が自分の家と仕事を離れて旅行する場合、番頭に権限を与え、番頭が主人の名によって数十万かせいだとしましょう。番頭は自分自身のためではなく、事業上の利益のためにそうしたのです。商人は、自分の利益のために番頭が全力を尽してくれるものと思ひ、彼を信頼し、自分の名と財産の使用を任せました。主イエスが昇天なさった時、しもべたちに、この地で御国を管理する仕事を任せて行かれました。主のわざの遂行のために必要なものを得るために御名の使用を彼らにお許しになったのです。彼らは、主の利益とみわざのために身をささげて生きる時にのみ、イエスの御名を用いる霊的な力を与えられました。御名の使用は、私たちが必ず、代表としているお方の利益を私たちの利益に優先させること

を前提としています。

このような御名の使用は、いのちの結びつきとして有効になります。商人と番頭の一体性は一時的なものです。しかし、私たちは、地上のいのちの一体性は、名の一体性をもたすことを知っています。子は、父のいのちを与えられているので、父の名を与えられています。しばしば、良い父を持つ子は、その名のゆえに他の人々から重んじられ、助けられてきました。しかし、それが名だけで父の性格が受け継がれていないことが分ると、それも永続きはしません。名と性格（ないし精神）は一致していなければなりません。そのような一致が見られる場合には、父の友人たちから二重の尊敬を受けます。性格が受け継がれる時、初め名だけが持っていた愛と尊敬を増大することになります。イエスと信徒の場合も同じです。私たちは一つであり、一つのいのち、一つの御霊を持っています。このゆえに、御名によって立つことができます。神に対しても、人に対しても、悪魔に対しても、私たちが御名を使う力は、霊的いのちの結びつきの量にかかっています。名の使用は、いのちとの結びつき次第であると言えます。イエスの御名と御霊は一つです。

御名を用いる力を得させる結びつきは、愛の結びつきであり得ます。貧しい花嫁は、花婿と結び合されると、自分の名を捨て花婿の名で呼ばれるようになります。今や、その名を完全に使うことができるようになります。彼女は彼の名で買物をし、拒否されることはありません。このように

なれたのは、花婿が彼女を選び、自分の利益を守ってくれることを彼女に期待しているからです。彼らは、今や一つなのです。ところで、天の花婿はこれに劣ることなく私たちを愛し、彼と私たちを一つにしてくれます。花婿は、御名を身に帯びる者に、御父の御前でそれを用いる権利を与え、必要を満たしてください。イエスの御名によって生きるために真実に自分自身をささげながら、その御名によって望むものを求め、また、霊的能力を増し加えられないような者はいません。他人の名を使うということは、自分自身の名とともに、自主的な自分の生活をも放棄することです。しかし、代りに名乗るその人の名のうちに、確かに私の所有のいっさいがこもっているのです。

このような例証は、他人の名を借りて何かを求めるために遣わされる使者、あるいは保証人の名によって無罪を訴える犯罪者についての普通の見解が、どれだけ不完全であるかを示しています。イエスの場合はそうではありません。イエス御自身、御父とともにおられたのです。私たちは不在者の名を用いて求めるものではありません。私たちはイエスに祈る時も、イエスの名によってしなければなりません。名は人物を表すものです。御名によって祈ることは、主にあって、また主のために生きるものとして、主御自身の利益といのちと愛に完全に結びついて祈ることです。ただイエスの御名のみが、私の心と生涯とを支配する最高位を占めますように。そして、私の信仰が、御名によって求めるものは決して拒まれることがないという確信にまで成長しますよ

うに。御名と、求める力とは切り離すことができません。イエスの御名が、自分の生活を支配する力となる時、祈りにおける神に対する力もまた、そこに見られるのです。

こうして見る時、すべてが、御名に対する私たちとの関係にかかっていることが分ります。生活を支配する御名による力が、祈りの力となります。このことを明確に示す聖句はいくらでもあります。「すべて主イエスの御名によって行ないなさい。」これは、「何でも求めなさい」と対になることばです。イエスの御名によってすべてを行うこととすべてを求めることは切り離せません。「私たちは、私たちの神の御名によって歩もう」というようなみことばを読むと、御名の力が全生活を支配しなければならないことが分ります。そうして初めて、祈りに力が湧いてくるのです。神は、口ではなく、生活を見て、御名がそれにどのような意味を持っているかを判断なさいます。聖書が、「主イエスの御名のためにいのちを捨てた者」とか、「主イエスの御名のために死ぬ覚悟ができている者」などと語っているのを見ると、私たちの御名に対する関係がどうあらねばならないかが分ります。御名がすべてであるなら、御名は私にすべてのものを与えてくれます。「あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましなさい。」イエスのこの約束は、文字通りの意味です。クリスチャンは、これに限界を設けようとしません。その約束はあまりにも気前がよすぎる、そのように無条件に頼るのは危険だと考えるのです。私たちは、「御名」ということばの中に、「安全」があることを理解していません。霊的な力は、その人が獲得した

力、御名によって生活し行動する力以上にはなりません。人々の前で御名を帯びる者は、神の前で御名を用いる力があります。どうか、聖霊が、御名の意味と、その正しい用い方を私たちに教えてくださいますように。御霊の働きによって、天のすべてに勝る御名が、私たちの心と生活の中で最高位を占めるようになるのです。

イエスの弟子たちよ。きょうの教訓を心の奥深くにとどめておきなさい。主は言われます。わたしの名によって祈るなら何でもかなえられます。天は、あなたに対して開かれています。霊界の宝や力は、あなたの周囲の人のために、あなたが自由に使えるようになっていきます。さあ、イエスの御名によって祈ることを学びましょう。主は、弟子たちにこう言われました。「あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。」イエスの弟子の一人一人が、王の祭司としての特権を行使し、自分の群や働きのためにゆだねられた力を自由に用いることができますように。クリスチャンは目を覚し、次のメッセージを聞きなさい。「あなたの祈りは、隠れた宝を獲得し、手つかずの事業を完成する。」さあ、目を覚し、イエスの御名を用いて、滅び行くこの世のために天の宝庫を開きなさい。王のしもべとして、王の名を用いることを学びなさい。「あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。」

恵み深い主よ。あなたがお与えくださる学課の一つ一つに深い意味があり、その一つを身につけただけで、正しい祈り方を知ることができるような気がします。きょうも、毎日祈る祈りはこれ以外いのではないかとさえ、感じさせられました。主よ。御名によって祈るとは何を意味するかを教えてください。生きることも、行動することも、歩むことも、語ることも、何事もすべてイエスの御名によって行うことを教えてください。私の祈りが、あの恵み深い御名による祈りとなるためです。

主よ。あなたの御名によって求めるものは何でもかなえてくださり、御父はそれをお与えくださるという尊い約束をしっかりつかむことができるようお教えください。あなたが、「わたしの名によって」と言われた時に言おうとされたすばらしい結びつきを私はまだ十分に理解しているとは言えません。まして、完全に身につけているなどとはとうてい言えません。しかし、「どんなことでもイエスの御名によって」という確信が心を満たしてくれるまで、この約束は手放さないつもりです。

ああ、主よ。聖霊がこのことを私に教えてくださいますように。あなたは、聖霊のことを、「助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊」と表現されました。聖霊は、あ

なたのしもべたちのうちに御名の力を現し、御名をあがめさせ、その御名だけを用いて、栄光をあなたに帰すために、あなたの御名によって天から遣わされました。聖霊はこのことの意味を御存知です。主イエスよ。あなたの御霊を私に住ませ、私を満たしてください。御霊の御支配と導きに、私のすべてをゆだねます。あなたの御名とあなたの御霊は一つです。御霊によって、御名は、私の生活と祈りの力となります。その時、私は、御名のゆえにすべてを捨て、御名によって人と神に語るようになり、この御名こそ、すべての名に勝る名であることを証明することができようになるでしょう。

主イエスよ。聖霊によって、御名によって祈ることを教えてください。アーメン。

注

キリストの御名によって祈るとは、どういうことでしょうか。それは、救い主の仲介によって、ただ神の前に出るということではありません。弟子たちが、祈りを教えてくださいとイエスに願った時、イエスはそれについて教えられましたが、その後、弟子たちにかう言われました。「あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。」御霊がくだるまでは、主の祈りの七つの願いごとは、休眠状態にありました。聖霊によって、キリストが弟子たちの心にくだっておいでになった時、弟子たちは、私たちの大祭司であるキリストが祈りによって御父から得た祝福を求めました。そのような願いは必ず答えられます。

た。御父は、キリストが求めるものは喜んでお与えになります。キリストの御霊は、私たちを教え、また動かして、キリストが批准し、御父の御前にささげる祈りをささげるようにしてください。このゆえに、キリストの御名によって祈ることは、義においてもキリストと一つになり、願いにおいても、内住の聖霊によって一つになります。御霊によって祈ることと、御父のみに従って祈ることと、キリストの御名によって祈ることは同じことです。御父御自身が私たちを愛し、喜んで私たちに耳を傾けてくださいます。上なる助け主キリストと、内なる助け主聖霊のおふたかたの仲保者は、御父の愛の賜物です。

このような見解は、最初は、一般に流行している見解よりも慰めの少ないもののように思えるかもしれませんが。一般的な見解によれば、キリストの御名による祈りは、おもにキリストの功績を私たちが信頼することだと言います。この見解の欠点は、救い主のとりなしの祈りを、御父のみに祈りにおける内住の御霊の働きと結びつけないことです。それだけではありません。キリストの仲介の働きについても十分に理解していません。仲介の働きとは、キリストのゆえに聖なる父が私と私の祈りを願ってくださるということだけではありません。キリスト御自身が、私たちの願いごとをキリストの願いごととして、私たちのために願ってくださることです。キリストが導き御血によって、あらゆる祝福を私のために獲得してくださったのと同じです。

キリストの願い、御父のみこころ、聖霊の教えによるならば、あらゆる祈りの唯一の本質的条件は、私たちはイエスの御名によって祈りをささげることができることです。このことは、キリストの御名による祈りは、自己検証と反省と自己否定なくしては不可能であるということです。換言すれば、御霊の助けなしには不可能なのだということです（サフィア『主の祈り』四一一、四一二頁）。